



なまえ

武田 こうじ

はじめも

さよならも

くらしのどちゅうにある

わからなかったことにも

なまえをつけて

わたしはあなたに

あいに行く

うそみたいな

ほんとのこと

ほんとなのに

りかいてきないこと

そんなおもいにも

なまえをつけて

あなたは

なにかいいかけた

わたしのなかのふかい

おくのおくのところ

ゆきがそっと

ふりつもっている



農作業のあと、みんなでお昼ごはん (大友よし江さん提供)

〈仙台市 三本塚〉 分かち合いが紡ぐ繋がり

3



この地域を
知るための
メモ

仙台市若林区
さんぼんつか
三本塚地区

3・11
その時

海岸から2キロほど離れた三本塚地区にも津波は襲った。仙台東高校のあたりまで到達したという。当時、畑で作業をしていた大友よし江さんは、本震直後に近くの電線が切れるなどの被害は見えていたが、その時は逃げずに自宅に待機していた。再び家の外へ出た時に、海岸沿いの松林を越えて津波が押し寄せてくるのを目の当たりにし、近所の方の車に相乗りして六郷中学校まで逃げた。夫の昇さんは近所への声掛けをしているうちに津波にのまれてしまった。近くの老人ホームまで津波で体が押し流された際に、幸いにして職員の方に手を伸ばしてもらうことができ、助かったという。同じく六郷中学校に逃げた佐藤かほるさんも相澤昭男さんも、口々に「津波が来るとは思わなかった」と話す。三本塚地区の浸水は2メートルにも及んだ。自宅からは、今まで見えなかった海が見えるようになった。

広々とした田んぼに点在する家々。かつて三本塚には、そうした風景が広がっていました。数軒の農家が固まり、屋敷まわりに森のようにイグネを育むようすは、遠くから見ると、まるで水の上に浮かぶ島のように見えたものです。人々は家の前の畑を耕し、まわりに広がる水田で米づくりを進め、農業を中心とした暮らしを続けてきました。

一帯は、慶長16年(1611)の大津波で大被害を受けたと伝えられています。東日本大震災と同じように、地震のあとに海から押し寄せた大津波が、陸をのみ込み深刻な被害をもたらしたのです。その後、江戸時代を通して、この荒廃した湿地の新田開発が行われていったのです。

三本塚の地は、宮城郡郷六村(現・青葉区郷六)の佐藤家友が、開発を行ったといわれています。

また、地元には、相馬地方から、相沢、大友、柴崎らの武士が来て三本塚の荒地を開発をしたという言い伝えもあります。今回お話をうかがった、相澤昭男さん、大友よし江さんは、その末裔なのかもしれません。大友さんには「うちは17代目」とうかがいました。

相澤さんのお話にもあるように、沖積平野ゆえの湿地の苦勞は、水田開発がなされたあとも長く続きました。相澤さんは「馬が湿地で足をとられたりすると起き上がれなくなるため、代掻きなどには牛を使った」と話します。いまでも、地元に残る荒谷、赤沼、潮入、境堀など、荒地や湿地などにまつわる小字名は、この地の土地に暮らしてきた人々の苦勞を思い起こさせてくれます。

湿地が解消するのは、昭和30年代に圃場整

備が行われてからのことでした。排水堀や排水機場が整備され、田んぼから水が抜けて作業は格段に楽になりました。「整備の翌年にはダンプが入れるようになり、夢のようだった」とは相澤さんのことばです。

しかし一方で、三本塚の地名の由来になったという亀塚、朝日塚、鶴塚の3つの塚(古墳)のうちの一つ、残っていた亀塚古墳は、圃場整備で姿を消しました。亀塚古墳は全長30メートルほどの前方後円墳で、昭和30年代半ばまで三本塚境堀の北端にありました。食糧増産をめざし、少しでも水田を広げようとする思いは、それほどまでに強かったといえるかもしれません。

三本塚は、明治22年(1889)に町村制が施行されるまでは、二木村の北端に位置し、その一部でした。文政6年(1823)に描かれた「二木村絵図」(仙台市博物館蔵)には、二木村の肝入(村の世話役)の名と並んで、「同二木村之内端郷三本塚

肝入卯八郎」の名が記されています。二木村にあっても一部独立した集落で、多くの人が暮らしていたのでしょう。

この大地震、大津波で、三本塚の水田の排水を担ってきた二郷堀のポンプ場は被害を受け、いまだ復旧していません。米づくりに生きてきた三本塚の人たちは、赤茶けた田んぼの行く末を見つめています。



▲田んぼも今年は手つかずのまま。海岸線に続いていた緑の松林は、まばらになった。(2011年10月撮影)

- 【参考文献】
・平凡社地方資料センター編『宮城県の名』平凡社、1987年
・角川日本地名大辞典編纂委員会『日本地名大辞典 4宮城県』角川書店、1979年
・六郷を探索会編纂委員『六郷を探索の会—二木・三本塚編—』仙台市六郷市民センター、2004年

編集後記

表紙の写真は、田植えを終えて皆さんでご飯を食ってから一休みしている一枚。昨年のものです。この三本塚地区では、手作業から機械化へと農業の形態が変わっても、「互いに助け合いながら地域で暮らす」という「結」の姿が変わらぬのだと感じました。そして、「結」で繋がる生活をとても楽しんでいるように思いました。写真からも、そうした雰囲気が出ています。そしてこの「結」は、地域内ことまらず、様々な人々を巻き込んで広がっているようです。今年も収穫を手伝うために多くの知り合いが蔵王の梅山まで訪れ、また、各方面から三本塚農作物クラブの復活を望む声が届くのだそうです。「たくさんの人に支えられて」と、取材の中で皆さんは何度も口にしていました。この繋がりが「漬物」という形となって再び現れることを、私も心待ちにしたいと思います。(田)

今回は
2012年1月ごろに
発行予定です。
ウェブサイトも
ぜひご覧ください。

◆ウェブサイト
<http://www.sendaief.jp/content/s09.html>
◆ツイッターアカウント: RE_project



※この紙はリサイクルできます。